

---

# 掌編集

星井金太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

掌編集

### 【Nコード】

N6874S

### 【作者名】

星井金太郎

### 【あらすじ】

自作の掌編を投稿していきます。

## 一 地蔵様

その地蔵様は、山道が傾斜をゆるめたところの、木の茂った道端に立っておわした。

いつ、誰が、どういついきさつで立てたのかさえ定かでない、ずいぶんと古い地蔵様である。顔も、袈裟も、かなり黒ずんでいる。しかしそれでいて、苔などは一切生えてないのだ。

東から差す朝の光は、地蔵様の頭上に傘の如くかぶさる緑の枝葉に遮られて、地蔵様の立つ場所はちょうど具合のよい涼しげな陰で隠れていた。

その地蔵様の前で、最前から何やら一心に念じているのは、背の低い、年に似合わず腰の曲がっていない、茶色の着物を着た旅装の老女である。ほつれた白髪のを傾け、皺は見られるが上品な顔の目をやわらかく閉じて、痩せた両手をいつまでも合わせているのである。

朝の日は、老女の背中へ、透明な光の帯となって降っている。一心に念じる老女の姿は、清らかで、凜として、そして美しい姿に見えた。自分勝手な俗念の気配など、まるで感じられないのだ。

ようやく老女は目蓋を開けて、それまで合わせていた右手を懐に伸ばすと、竹の皮で包んだ物をひとつ取り出した。包みは、地蔵様の足元に置かれた拍子に、パサリと音を立てて開いた。見れば、一個の握り飯である。白い握り飯を供えた老女は、何も言わずにその場を離れた。菅笠をかぶり、杖を拾って、日の当たる山道を上って行った。

と、その時である。それまで冷たい済まし顔を保っていた地蔵様のお顔が、鼻から息を抜いて、フツ、と笑った。ざらついた頬がかすかに動いた。

(なかなか殊勝な老婆ではないか)  
そう言いたげな、笑い方だった。

真昼。

太陽が真南に高々と懸かって、山道にまぶしい光が満ちた。しかし地蔵様の立ち位置だけは、うまい具合に木陰である。地蔵様は涼しい顔をしながら、足元に白い握り飯を置いて、どこか遠くを見ているらしい。地蔵様の目は、開いているかどうかわからないほど薄い。

そこへ、大きな罵声を交えて、一群の足音が坂の下から上つて来た。六つの人影が勢いよく駆けて来る。一人の渡世人が地蔵様の前に来てくると振り返り、それを博徒らしい五人がサツと取り囲んだ。いずれも長ドスを抜いている。渡世人は三度笠をせわしく動かす、紺の道中合羽の裾を翻し、自身を取り囲む五人を見回した。肩で息をして汗をしたたらせた。そして渡世人は、震える声で哀願したのである。

「たっ、頼む、見逃してくれえ……あいつが親分さんの女だとは知らなかったんだ」

博徒の一人が厳しく言い返した。

「知らなかったですむか！ 落とし前はきっちりつけさせてもらおうぜ！」

長ドスをきらめかせながらズイと突き出す。

「頼む、後生だ！ だいたいあれは、女が俺を誘ったんだ。なっ、わかるだろ？ 見逃してくれたたっていいじゃねえか？」

「うるせえ！ 往生際が悪いぜ。黙ってさっさとくたばっちまいな！」

そのセリフを合図に、後ろの二人が斬り込んだ。渡世人はそれを払いのけたが、すかさず別の三人が斬りつけて来た。

「チクシヨー！ チクシヨー！」

金属の打ち合う音が続いた。渡世人は死にもの狂いで長ドスを振るったが、しかし、結果は最初から決まっていた。

「アアツ……！」

博徒の一人が後ろから渡世人の左肩を斬り裂いた。渡世人は一度のけぞり、叫び声を上げながら滅茶苦茶に長ドスを振り回した。顔を歪めて泣いている。

「死にたくねえー！ 死にたくねえー！ 誰か助けてくれー！」

そこに五人が次々と斬りつけ、渡世人の体から鮮血が上がった。血しぶきが、パパパツ、とあちこちへ飛んだ。しかし、地藏様にかかりかけた血しぶきだけは、なぜか空中で不自然に向きを変え、まったく別の方向に逸れてしまった。渡世人は天を仰いで痙攣し、五人の博徒は血塗られた長ドスを構えて渡世人をにらんでいる。地藏様をよけた血しぶきのことなど、その場の誰一人気付いていない。怪しく光った錫杖のことも、真っ白なままの握り飯のことも、もちろん誰も、気付いていない。

「死に……たく……ねえ……誰……か……助……け……て……」

渡世人は血溜まりに倒れた。その体はずたずたに斬り裂かれて、ボロ雑巾も同然であった。

「さあ、そいつを担げ。親分のところにけえるぞ」

下っ端らしき一人が渡世人の屍を担ぎ上げて、五人の博徒は引き返した。渡世人の長ドスとぼろぼろの三度笠とが置き去りにされた。血溜まりが残り、あちこちに血痕が残っていたが、地藏様のまわりだけ不自然にきれいだった。鉄の臭いの風に吹かれて、黄色い花が、可憐に揺れた。

と、その時である。それまで冷たい済まし顔を保っていた地藏様のお顔が、鼻から息を抜いて、フツ、と笑った。ざらついた頬が、すかに動いた。

（やれやれ。まっ、そういうこともあるわな）

とでも言いたげな笑い方だった。

昼下がり。

太陽はやや西に移って、光の向きも変わったはずだが、やはり地蔵様は木陰の中である。

血溜まりも、血痕も、いったいどうしたとか、跡形もない。三度笠も長ドスも消えてしまった。ただ地蔵様の足元に、白い握り飯が置かれているばかりである。

地蔵様は、あの涼しいお顔で、どこか遠くを眺めている。

不意に足音が聞こえた。地面をこする、慌てた、もつれるような足音である。坂道を上って現れたのは、若い尼僧であった。草履はどこかで脱げてしまったらしい。墨染めの衣の裾を乱して、しきりに後ろを気にしながら、走り慣れぬ足で走っている。と、その足が、石にとられて左手から転倒した。墨染めの衣の裾が開いて、白い足袋と白いふくらはぎが露になった。尼僧は、白い頭巾をかぶった、青白い整った顔を上げて、潤んだ大きな目をいつそう大きくして、腰から上だけで振り返った。その目は怯えて開かれているのだ。

大柄な髭面の浪人が坂を上って来た。黒い着流しはところどころほつれ、もはや鬚も結っていない頭髪は伸ばし放題である。浪人は、黒鞘の刀を右肩に担いで、下卑た笑みを含んだ目で尼僧の細い体を足から顔までしつこくねめまわしながら、慌てた様子もなく歩いて来た。時折、髭に覆われた中で赤いものが動くのは、どうやら舌なめずりをしているらしい。

「おやめください……。おやめください……。御仏の罰が下りますぞ……！」

尼僧が尻を土に擦って後ずさる。地蔵様の前に来てようやく立ち上がることができた。地蔵様はどこか遠くを見ている。尼僧が再び駆け出そうとした時、

「はははっ」

尼僧は、浪人に腰を強く押されて、暗い茂みの中へ転がり込んだ。浪人も腰帯を解きながら茂みに入る。

しばし、争うような物音がしていた。そして一声、悲鳴が上がった。

あとはただ、女の押し殺したすすり泣きの声と、男の性急な息遣いとが聞こえるばかりであった。茂みは深く、そこで何が行われているかは見えない。

と、その時である。それまで冷たい済まし顔を保っていた地藏様のお顔が、鼻から息を抜いて、フツ、と笑った。ざらついた頬がすすかに動いた。

(やれやれ。まっ、そんなこともあるわな)  
とても言いたげな笑い方だった。

夕暮れ。

西に沈み行く太陽が、この山道にも一面に、淡い赤色の光を降らせている。

鳥が一声鳴いたきり、あとは静かな夕暮れである。

地藏様は、やはり何事もなかったかのような済ましたお顔で、相変わらず足元に白い握り飯を置いて、どこか遠くを眺めている。枝葉は巧みに西日を遮っている。

そこへ、足音もたてず、一人の男の子が現れた。弱々しい、ほとんどふらつくような足どりで、その男の子は坂を上って来た。足は、すり傷だらけの、汚れた裸足である。着物も、顔も、汚れていた。

「ああ、腹が減ったよう……」

小さな汚れた両手で腹を押さえると、ぐう、と小さく虫が鳴いた。「もう、丸三日、水しか飲んでねえんだ……」

振り返ったところで、下り坂は曲がって先も見えない。

「でも、おいらはもう、村へは帰れねえんだ。村へ帰っても……」  
にわかに男の子が顔をくしゃくしゃにしまったのは、目にあふれた涙をこらえるためであった。鼻をすすり上げ、両目を拳骨で拭った。

「ああ、腹が減ったよう……」

拳で涙を拭い終えた時、男の子の目が何かに気付いた。男の子が

気付いたのは、木陰に平然とたたずむ地蔵様である。そして、その足元に供えられた　白い握り飯にも気付いた。

汚れも、虫も、付いていない、真っ白な、うまそうな、握り飯である。

男の子はためらった。供え物を盗むのはよくないことだ。右手を伸ばしかけ、やはり引つ込めた。それでも、口の中では唾があふれて、男の子は唾を飲み込んで喉を鳴らしたのである。

「いったい、誰が、責められよう？　腹をすかせた子供なのである。水しか口にしていない子供なのである。村を追われた子供なのである。帰る場所もない子供なのである。」

「いったい、誰が、責められよう？　かわいそうな、不幸せな、子供なのである。」

男の子はそろそろと右手を伸ばした。震える、汚れた、指先が、白い握り飯をつかみかけた。

その時である。

「ひっ……」

男の子の細い手首が、青灰色のざらついた手によってしっかりと握られた。男の子の手は握り飯をつかむ寸前で硬直した。ざらついた手が、次第にその握力を強めた。

「いつ、痛いよう……」

男の子が、痛みと恐れに涙を流し、その目をゆっくりと手首から上げると、そこには、そう、ざらついた石でできた地蔵様のお顔が、ぶるぶると気味悪く震えながら、怒りに見開かれた石の両目で、男の子の顔をギロリとねめつけていた。そして初めて言葉を発した。

「それに触るな……わしのだぞ！」



## 二 幻燈

夜。降りやまぬ雪の中、彼は枯れ木に背中をもたせ、脚を投げ出し座っていた。一面広がる白い雪の上、彼はただ一人取り残されて、雪が闇の中を緩慢にすべり落ちて来る他には、動くものなど見当たらない。彼のコートに雪が積もった。帽子はどこかで失くしてしまつた。うつろな瞳は雪の一点を見つめ、こけた頬の色は青ざめている。ただ、紫の唇の端に、時折かすかな笑みが浮かんだ。

彼の瞳はなにも映していない。彼の外にある景色のことは。彼の瞳は、彼の内側、彼の心をかすめる影を、ひとつ、またひとつ、映していった。そのたびに彼の口元には、うつすらとした笑みが現れては消えた。

幻燈……。

彼の瞳は、暖炉の火に照らされた食卓を映した。卓の上には温かな食事が並べられ、両側には、美しい女性と、幼い少女。彼に向けられるのは、微笑みと、そして、信頼や愛情を込めて彼を見る黒い瞳。

、褐色のたくましい首が映った。馬は彼を乗せ、木々に挟まれた小道を誇らしげに歩むようであった。道はどこまでも続いていて、彼はこのままどこまでも進むつもりでいた。

馬のいななきが聞こえたと思うと、彼の目の前に、三人の老人が立っていた。そこはどこかの回廊らしく、彼は自分の足で石の床に立っていた。老人たちはゆったりとした長衣をまとい、大きな額は額から頂がはげ上がり、白い鬚を胸元まで垂らしていた。老人たちが彼に語りかける言葉は穏やかで、真理への敬意と、理性への信頼に満ちていた。彼はこのままいつまでも老人たちと語り合っていたと思つた。

やがて、老人たちの声が、かすれ、途切れ、揺らぎ、完全に消えて……そして、無音。

彼は一度だけ口元に笑みを浮かべて、かすかに息を漏らして、それからゆっくりとまぶたを閉じた。もはや彼の顔にはなんの表情もなく、冷たく青ざめたまま、硬直し、時を止めていた。彼の体に、髪に、顔に、雪が降り続ける。

雪の中の骸。すでに彼はいなくなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6874s/>

---

掌編集

2011年10月8日23時23分発行